

令和 6 年 10 月 23 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02643

研究課題名（和文）家庭養育と乳児保育の質の向上を促す家庭と乳児保育の連携プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of cooperative programs connecting with families and infant-nurseries to promote the improvement of the quality of family and institutional nurturing.

研究代表者

寺見 陽子 (Terami, Yoko)

神戸松蔭女子学院大学・神戸松蔭こころのケア・センター・客員所員

研究者番号：20163925

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：0・1・2歳児の保護者770名、保育担当者288名にWEB調査した結果、保護者支援は保育の構造とプロセス、言葉の保育内容に影響し、保護者支援並びに保育者との関係が、親の養育性・育児ストレス・子どもとの関わり、保育の構造と子どもの社会・情動能力に直接影響していた。また、言葉の保育の内容を介して保育の構造とプロセス、子どもの社会・情動能力に影響を与えていた。この結果を基にプログラム開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、保護者の育児不安とともに不適切な養育や虐待が社会的課題となっている。また、保育の場では、保護者の状況に応じた多様な保育が展開され、保育の質の確保と向上が課題となっている。保護者の育児不安は特に子どもが0・1・2歳の頃に高く、人間性の基盤ができるこの期の保護者支援は重要である。OECD（2015）は、保護者との連携は保育の質の向上に寄与することを指摘している。しかし、保護者との連携と保育の質の向上に関する研究は少なく、保護者支援が保育の質の向上につながる連携プログラムの開発は社会的課題の解決につながる意義がある。

研究成果の概要（英文）：As a result of an online survey of 770 parents of 0, 1, and 2-year-old children and 288 childcare managers, parental support had an impact on the structure and process of childcare and the content of language of childcare, and parental support and relationships with childcare providers directly affected parenting ability, childcare stress, relationship with children, childcare structure, and children's social-emotional abilities. In addition, the structure and process of childcare and the social and emotional abilities of children were influenced by the content of verbal childcare. Based on these results, a program was developed.

研究分野：保育

キーワード：0・1・2歳児保育の質 家庭養育の質 質の向上 保護者支援 保育者と保護者の連携 連携プログラムの開発

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

少子化・核家族化等による社会構造や価値観、人間のライフスタイル等の変化によって、保育施設に求められる社会的責務や役割が大きく変化した。子どもの保育も、地域や家庭・保護者のニーズに応じて多様な形態で行われるようになり、質の高い保育の提供が喫緊の課題となっている。そうした中、保育の質に関する研究が近年盛んに行われている。

海外では、イギリスでは国内のさまざまなタイプの保育施設の環境を定量的に評価した長期縦断調査(Effective Preschool and Primary Education; EPPE)や、アメリカでは国立小児保健・人間発達研究所(National Institute of Child Health and Human Development; NICHD)による追跡調査(The Study of Early Child Care and Young Development; SECCYD)がなされ、幼少期に良質な保育を経験することが長期的なポジティブ効果を与えることを示している(Sylva, et al., 2010; Vandell, Belsky, Burchinal, Steinberg, Vandergrift, & NICHD Early Child Care Research Network, 2010)。EPPE や NICHD による大規模研究プロジェクトは、保育の質を「親の満足度」「親にとっての利便性(長時間預かりなど)」といった視点ではなく、研究者が開発し信頼性・妥当性の確認された評価尺度を用いて評価している。また、学力面だけではなく社会情動的スキルも含む、子どもの発達の様々な面を乳幼児期のみならず長期的に追跡調査し、保育の質の効果を定量的に実証している。現在では、英米に限らず、北欧諸国、東アジア諸国においても、行政の支援による大規模縦断研究がすでに着手され、エビデンスに基づく政策提言がなされている(秋田・佐川, 2011)。しかし、これらの多くは、3歳児以上の就学前児を対象にしたものであり、0・1・2歳児の保育の実践的な検討はあまりなされていない。

日本では、保育の質に関して、子どもの活動に保育者が子どもをいかに理解し、どのように携わるかという保育者の在り方や、保育の内容をどのように捉え、子どもをいかに理解して、見通しのある実践をしているか、といった保育者の専門性を問う研究や保育の質尺度を検討する研究がなされている(秋田他, 2007)。そうした中に、3歳未満児の研究も散見されるが、質の論議が多面的で、一致した「質」を論じているとは言い難い。さらに、今日の経済的教育的環境において、発達のより早期におこなわれる保育がどのようなものであるべきか、またどのような影響が子どもの育ちにもたらされるのかについて、上記のような長期かつ大規模な縦断研究による報告はまだない。今日、子ども・子育て新制度のもと乳児保育の拡充が図られ、全国的に小規模型保育所が急増している。そこでは、保育サービスの視点が強く、乳児保育そのものの在り方は十分に検証されているわけではない。乳児期は、子どもの発達の基盤を形成する時であり、時代やシステムがいかに変わろうとも、そこでなされる保育の在り方は、子ども自身の発達にとっても、日本の未来にとっても非常に重要な問題である。それは、小規模型保育所に限らず、保育所や認定こども園においても、乳児保育の質の向上は重要かつ喫緊の問題と言わざるを得ない。さらに、保護者の子育て不安や子育ての仕方が分からず普通に育児しているのに不適切な養育になってしまう現状がある。

本研究代表者である寺見は、平成28年度から平成30年度科学研究費基盤研究(C)「今日の親の親性形成と親子関係の質の向上を促す支援プログラムの開発」(課題番号:16K01899)(延長により平成31年度まで行った)において、9カ月児をもつ親のかかわりを共同注意に着目して検討した。25年前の母子と今の母子の比較を行ったところ、母親のかかわりにおいて乳児への言葉かけが25年前に比べ、ほぼ二分の一で、発話数語彙数ともに有意な減少が見られた。今後、養育・保育の専門家のいる場での意図的な支援プログラムを提供していく必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、保護者の養育性・育児への不安とサポート・家庭環境・子どもとの言語的関わり、子どもの言語と社会-情動発達、保育施設における保育の構造とプロセスの質、子どもとの関わり、言葉の保育内容、保護者支援の視点から、0・1・2歳児の家庭養育と0・1・2歳児の保育の質の向上並びに0・1・2歳児の育ちを促す、保護者と保育施設との連携プログラムの開発をすることを目的とした。

本研究は、I. 諸外国における0・1・2歳児保育における家庭との連携及び0・1・2歳児の保育の質の評価に関する文献研究、II. 0・1・2歳児の保育における家庭と保育施設の連携の現状と家庭養育並びに保育上の課題を明らかにする調査研究、III. 家庭養育の質と0・1・2歳児の保育における質の向上に関する検証—保育者の家庭養育への介入は0・1・2歳児の保育と家庭養育の質を高めるか—に関する検証、を行い、IV. 家庭養育と乳児保育の連携プログラムの開発に関する研究を行った。

3. 研究の方法

(1) 日本における0・1・2歳児の現状と課題の文献研究

日本におけるこれまでの0・1・2歳児の保育の歴史、現状と課題、0・1・2歳児の保育の在り

方、保育の内容、実践に関する研究の動向と課題、0・1・2歳児の保育の質に関する先行研究を
探る。

(2) WEBによるアンケート調査

1) 対象：0・1・2歳児をもつ保護者770名と保育所(園)、認定こども園、小規模型保育所、
家庭的保育所の0・1・2歳児保育担当保育者228名

2) アンケート内容

<0・1・2歳児をもつ保護者> 属性(年齢、性別、子どもの年齢、子ども数、利用施設、家
族数、就労の有無・職種・勤務形態・勤務時間、学歴、収入)・養育性・育児不安・育児の相談
相手・育児のサポート・園の保育者との関係・利用施設の保護者支援の内容と効果・家庭におけ
る子どもとのかかわり・子どもの言語発達のためにしていること・言葉に対して重視しているこ
と・子どもへの話しかけ方・家庭環境(絵本の使用、テレビ等の視聴、PC等電子機器の使用)・
子どもの言語発達の状況・社会-情動的発達の状況

<0・1・2歳児保育担当保育者> 属性(年齢、性別、学歴、勤務年数、勤務形態、勤務施設
の型、経営主体、設立年、開所時間、所在地域)・保育環境の構造・保育のプロセス・言葉の
保育内容・子どもの社会-情動的発達の姿・子どもへの言葉かけ・保護者支援の内容・保育計画
や保護者支援の決定者・外国にルーツのある保護者へのかかわりと対応

3) 倫理的配慮：神戸松蔭女子学院大学倫理審査委員会から承認を受けた。

(3) 0・1・2歳児をもつ保護者と0・1・2歳児保育担当保育者を対象にしたインタビューの実施

1) 対象：0・1・2歳児をもつ保護者10名と保育所(園)、認定こども園、小規模型保育園、家
庭的保育所の0・1・2歳児保育担当保育者10名

2) インタビュー内容

<保護者への調査内容> ・年齢・性別・学歴・施設を利用している子どもの年齢・子ども
の人数・家族数・就労状況・職種・勤務時間・養育における効力感・育児不安感や負担感・精
神的健康状態・養育者の省察機能・子育てについての実感について・子育てにおける相談相手
や手伝いを求める相手について・担任保育者との関係性について・所属園における保護者支援
や子育て支援の取り組みの内容とその感想、園の運営や保育へ参加の有無について・家庭での
子どもとの関わり(遊ぶ時間、遊びの内容、子どもとの関係、子どもとの会話、言葉の発達の
ためにしていることや重視していること、身の回りのことをしているときの話しかけ方、おも
ちゃ、絵本、ままごと、テレビ等の視聴、家庭での子どもの様子)

<0・1・2歳児保育担当保育者> ・年齢・性別・学歴・保育経験・現在の園での勤務年数・
勤務形態・勤務園の形態・経営主体・設立年・定員と子どもの年齢構成・開所時間・地域・園
の保育環境・クラスの状況・保育において重視していること・社会-情動的子どもの姿・子ども
とのかかわり・0・1・2歳児の保育における課題について・0・1・2歳児の言葉に関する
保育の内容について・保護者との関係性について・所属園における保護者支援や子育て支援の
取り組みの内容と成果、感想・園の運営や保育への保護者の参加について・保護者支援や子育
て支援への取り組みと日常保育の関係、与える影響について・外国にルーツのある子どもと
の関わり

3) 倫理的配慮：京都教育大学倫理審査委員会から承認を受けた。

(4) 家庭養育と乳児保育の連携プログラムの開発

○先行研究とアンケート調査並びにインタビュー調査の結果から、012歳児の保育における保
護者との連携マップを作成し、保護者と園との連携プログラムを考案する。

○アセスメントー012歳児の保育はITRS-R、家庭養育はアタッチメント測定、日本語版マッ
カーサー乳幼児言語発達質問紙(JCDIs)、非認知能力測定(国立教育研修所教育政策・評
価研究部・幼児教育センター(2017.3)が行った調査結果を基に尺度を作成し、家庭養育と
の連携プログラムの効果を検討する。

4. 研究成果

(1) 日本における0・1・2歳児の保育の現状と課題に関する文献研究

乳児保育研究は、乳児保育の是非論から始まる。現場の実践研究においても、乳児保育の実施
や乳児が集団生活をする事への賛否が論議されている。その背景には、「子育ては女性の役割」
「3歳までは母の手で」といった社会通念による女性の就労への批判やアタッチメントやホスピ
タリズムに関する学術的知見、ベビーホテルがもたらした社会問題等がある。乳児保育における
政策的な取り組みやアタッチメント研究の新たな展開、少子化の到来等による社会・経済的情勢
の変化や子育て環境の変化等により、その論議は今日の保護者の子育て生活と子どもの発達の
保障の視点に移行してきた。乳児保育が一般化されて以降、乳児保育における物的・人的環境の劣
悪さを改善する工夫と同時に、保育内容に関する研究も行われるようになった。発達研究におい
ても、複数の大人との愛着関係の重要性も指摘されている。少子化の到来とともに女性の就労の
一般化等により、乳児保育の拡充や保育形態の多様化、子育てへの不安やストレスへの対応、家
族や地域の教育力の低下に伴う不適切な養育への危惧等、これからは、家族・地域を巻き込み、

親・家族にこだわらない、子育てを軸にした関係づくりの中で乳児の健全育成を促していく、質の高い保育が求められる。

海外においては、例えば、アメリカでは、ヘッドスタート・プログラムがあり、社会的な不利を抱える3～5歳児に提供され、0～2歳児には、アーリー・ヘッドスタートプログラムが用意されている。ヘッドスタート・プログラムは、親をプログラムに引き込むようにデザインされ、親教育ワークショップと地域行事、授業参観、さらにはヘッド・スタートセンターの職員になる機会も用意されている。ヘッドスタートでは、家庭訪問員の受け入れ、絵本の読み聞かせ、文字や数字の教育が課せられ、子どもと一緒にゲームをしたり演奏したり、商店や遊び場や公園に子どもを連れて行ったり、栄養状態や健康状態を管理したり、することが奨励されている。ヘッドスタート活動により多く関与した親は家庭での関与が増大するとともに、子どもの就学準備に係るあらゆる面で助長が認められている。ノースキャロライナ州のスマートスタート・プログラムは、親関与による保育の質の向上を試みた成功例である。また、オーストラリアでは、教育格差是正を目的とし、先住民や英語以外の言語が家庭での主要言語である家庭など、社会経済的に不利な状況にある就学前の子どものいる家庭を対象とした教育プログラム、Home Interaction Program for Parents and Youngsters (HIPPY) が実践されている。HIPPYの特徴では、国の保育カリキュラムガイドラインに対応したプログラムおよび家庭訪問とチューター制度、子どもの就学に向けた認知能力の発達、保護者の自信や地域への帰属感の醸成、就学前の教育支援を地域全体で向上させる可能性など、子ども教育を中心に据えた連携が行われている。

これらは日本における文化的に多様な背景をもつ子どもの家庭での教育的関わりの仕組みを構築するための連携のありかたを考えるうえで重要な示唆となる。

(2) 0・1・2歳児をもつ保護者と保育担当者を対象にしたアンケート調査の結果

1) 保護者へのアンケート調査結果

0・1・2歳児を持つ保護者への質問項目のうち、養育性、育児ストレス、子どもとの関わり、言語的かかわり、保育者との関係、園で行われている保護者支援、保護者支援の成果、子どもの言語発達、家庭環境、に関する項目の5段階評定による尺度に対して因子分析（最尤法・プロマックス回転）と分散分析、重回帰分析を実施した。

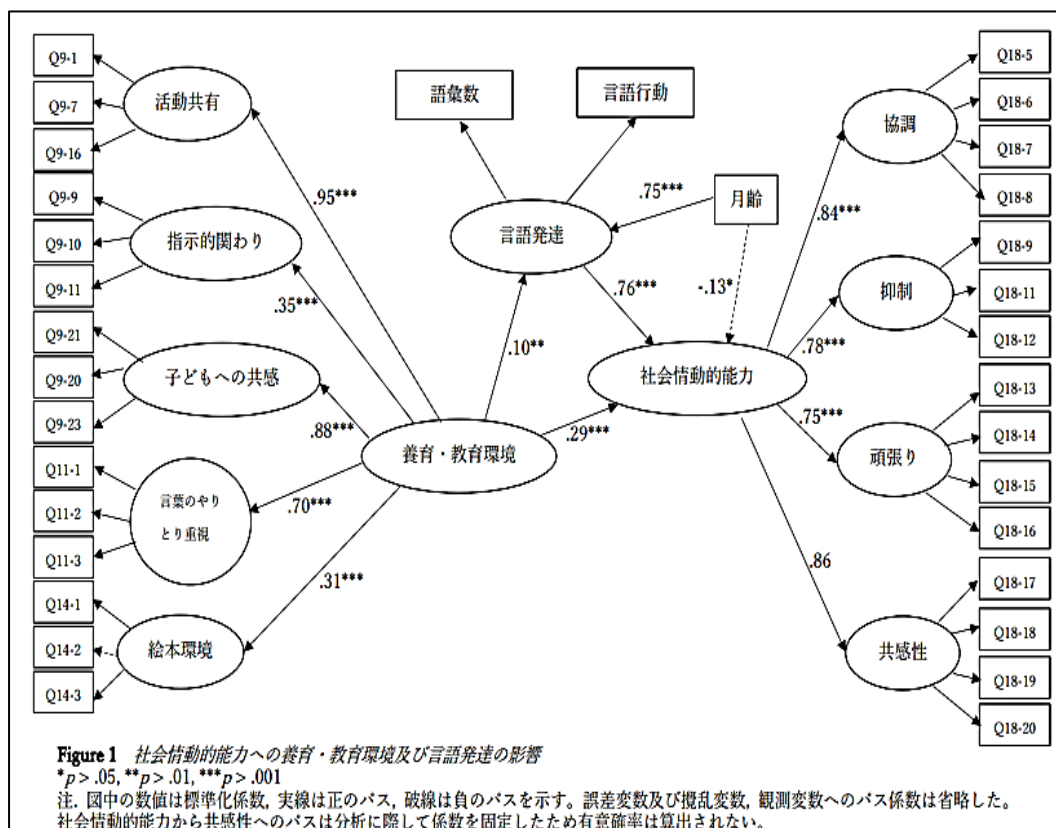


Fig.1 社会情動能力への養育・教育環境及び言語発達への影響

その結果、保護者支援と保育者との関係が、親の養育性・育児ストレス・子どもとの関わりに影響を与えていた。特に子どもへの興味と言語的かかわりは全ての因子に関連していた。子どもの言語発達と家庭の養育環境については、因子分析（最尤法・プロマックス回転）と共分散構造分析を実施した結果、養育・教育環境は、直接、社会情動的能力に影響し、言語発達を介した社会情動的能力に影響していた(Fig.1)。

2) 保育者へのアンケート調査結果

0・1・2歳児担当保育者に対する質問項目のうち、保育の構造、保育のプロセス、言葉に関する保育の内容、保育者の言語的かかわり、0・1・2歳児の社会・情動能力、保護者支援の内容、に関する5段階評定による尺度に対して、因子分析（最尤法・プロマックス回転）と分散分析、重回帰分析を実施した。

その結果、保護者支援は、保育の構造、保育のプロセス、言葉に関する保育の内容に影響していた。これらの結果をもとに、保護者支援が、保育の構造、言葉に関する保育の内容、保育のプロセスを介して、社会-情動因子に影響を与えるという仮説モデルを設定し、社会-情動を目的変数、他の因子を説明変数にして共分散構造分析を実施した結果、保育のプロセスの質を除いて全て有意な推定値が得られた(Fig.2)。

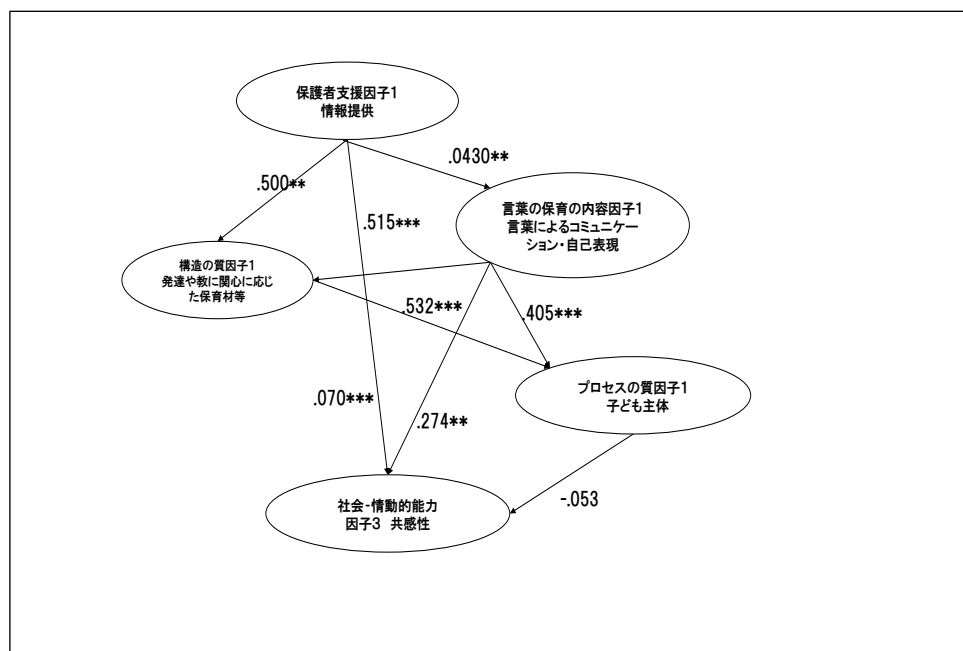


Fig.2 保護者支援が保育の質・子どもの発達に与える影響

(3) (4) インタビュー調査並びにプログラム開発

コロナ感染症の拡大により、一時研究がストップしたため、研究の進行が大幅に遅れ、海外調査が実施できなかった。

現在、保護者と保育者を対象としたアンケート調査の結果をもとに、0・1・2歳児を持つ保護者並びに0・1・2歳児担当保育者へのインタビュー調査を実施しているところである。インタビュー分析を通して、各因子の関連を具体的に検討し、保護者支援マップを作成し、0・1・2歳児の家庭養育と0・1・2歳児の保育の質の向上並びに0・1・2歳児の育ちを促す、保護者と保育施設との連携プログラムの開発を試行しているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 林悠子	4. 巻 5
2. 論文標題 多様な文化的背景をもつ子どもの保育における園と家庭とのパートナー シップ構築の課題と可能性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14946/0002000062	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林悠子	4. 巻 7
2. 論文標題 「オーストラリアの保育指針にみる多文化保育における家庭との連携」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 24 - 35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子	4. 巻 7
2. 論文標題 「乳幼児の保育・教育における保育者と保護者のパートナーシップに関する考察：0・1・2歳児を考える」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 11-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子	4. 巻 第6号
2. 論文標題 乳児保育はどう語られてきたか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林悠子	4. 巻 第3巻
2. 論文標題 文化的に多様な背景を持つ就学前の子どもの家庭における教育的関わりへの援助：オーストラリアの事例から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 97-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子	4. 巻 第3巻
2. 論文標題 日本の母親と乳児との共同注意と関わりに関する研究：2017-18年と1994-95に生まれた乳児に対する母親の言葉かけの比較検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 125-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002309	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ミシェル・ヴァンデブロック/北野幸子	4. 巻 22
2. 論文標題 園と保護者との連携における互恵性を考える - ベルギーのフランダースにおける家庭との連携の事例を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チャイルド・サイエンス	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺見陽子・林悠子	4. 巻 第5号
2. 論文標題 乳児保育における保育者と家庭・保護者との連携に関する今日的課題 - 保育の質の向上の観点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林悠子	4. 巻 第5号
2. 論文標題 外国につながるのある子どもの保育における家庭との連携の課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学教職支援センター年報	6. 最初と最後の頁 21 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林悠子	4. 巻 No.2
2. 論文標題 外国につながる子どもの保育における家庭との連携の課題：子どもの言語発達の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸松蔭女子学院大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 67-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14946/00002256	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計6件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 寺見陽子
2. 発表標題 「今日の母・父親の乳児との共同注意と関わりに関する考察」
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 榎原久直・寺見陽子・小椋たみ子・久津木あや
2. 発表標題 「子どもの発達を保証するためには何が必要か」
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小椋たみ子・寺見陽子・土生川雄彦・北野幸子・林悠子
2. 発表標題 社会情動的能力への言語発達，養育・教育環境の関与
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 寺見陽子・小椋たみ子・北野幸子・林悠子
2. 発表標題 0・1・2歳児保育における保護者支援と保育者との関係が 親の養育性・育児ストレス・子どもとの関わりに与える影響
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 寺見陽子・小椋たみ子・北野幸子・林悠子
2. 発表標題 保護者支援が0・1・2歳児の保育の質に及ぼす影響について
3. 学会等名 日本保育学会大77回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 寺見陽子
2. 発表標題 保育における保護者支援が，保育の質・保育者のかかわり・保育の内容を介して，0・1・2歳児の社会・情動的能力に与える影響
3. 学会等名 日本教育心理学会第66回総会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	北野 幸子 (Kitano Sachiko) (90309667)	神戸大学・人間発達環境学研究所・教授 (14501)	
研究 分担者	林 悠子 (Hayashi Yuko) (90584483)	神戸松蔭女子学院大学・教育学部・准教授 (34513)	
研究 分担者	小椋 たみ子 (Ogura Tamiko) (60031720)	大阪総合保育大学・児童保育学部・教授 (34445)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------